山と博物館

第20巻 第4号 1975年4月25日 大町山岳博物館

鬼無里のミズバショウ（5月） 撮影 斉藤 忠彦

バランスの大切さ

雪深い信州には春は足音をたてて近ずいてくる。

これは長い間雪の下で生活してきた人が待ちわびていた音でもある。

雪消えとともに、野原の生物はまちかねていたかのように活動をはじめる。

青い芽は春の象徴であり、耳にする小鳥の声も心なしかうらかに聞える。

カタクリやニリンソウの花の咲き乱れる野原を散策するのは、都会の人ならずとも楽しいものである。

また、この頃から信州を訪れる人も冬のスキーヤーから、ハイカーや観光客にとって変る。

特にこの頃は、国民宿舎やユースホステルを利用して、古い宿（しゅく）や史蹟、自然の中を足で歩くことに人気があり、若い人はジーパン姿で気軽に訪れている。

受け入れ側も、サイクリングロードや自然遊歩道の整備や新設に力を入れている。

信州の鬼無里では、数年前にミズバショウの大群落が偶然発見され、その規模は尾瀬をしのぐのではないかといわれた。

勿論、これが見逃される訳はない。現地までの道が作られ、ルートには木道も作られた。

訪れる人は年々その数を増しており、当事者の企画はヒットした訳で喜ばしいことである。そこで関係者、当事者はいきおい力こぶが入ろうというものである。

またミズバショウが良く見えるようにと邪魔な木や枝をいたるところで切りはらった。お陰でミズバショウの林の中は陽ざしが差しこみ明るくなり見通しがよくはなったものの次の年から、ミズバショウは小型になり、以前のように見事なものは影をひそめてしまったのである。そこに生活する生物のバランスを崩したことによる微妙な変化がもたらした結果に他ならなかったのである。

人間サイドにのみ立った整備（？）は時に、成功を失敗に導くことになりかねない要素を多分に含んでいる。

（グチ猿）

大和由松氏の思い出

片山　潔

有明のガイド（山案内人）大和由松氏は、昭和四十五年六月に永眠した。七十二歳であった。安曇野の一角、大町の二ツ屋に生れ、峻烈にして荘厳な後立山連峰と共に生きた、誠実な生涯であった。

私は、大和氏の五十年に及ぶガイド生活の晩年を、一緒に歩いてもらったが、既に、第一線を退いており、どこへ行っても「長老」で通っていた。併し、脚は全く確かで、穂高の岩場も、氷雪の乗鞍岳も、裏山を散歩するような気易さであった。

幾度も一緒に歩く中に、大和氏はこの世の名利蓄財からおよそ縁遠く、ただひたすらに、山に挑み山を愛した稀なガイドであることを知った。五十年という長年月にわたって、一途に山岳に捧げた情熱は、ただならぬものである。古いガイド仲間は、或は、山小屋を或は、山林の商売をする商人になったりしたが、大和氏にはそのような才覚は全くなく、又、関心もないようだった。終生変らざる、一介の案内人であったところに、先ず大和氏の面目がある。

確か昭和三十年の三月であったと思うが、大和氏と二人乗鞍岳に登る途中、番所で時ならぬ風雨に遭って、斉藤すみえさんの茶屋で、二・三日足止めされたことがある。たまたま、飛弾高山の新聞社の人が泊り合せていた。その記者は、何となく大和氏に話しかけたら、大和氏の風采からは想像出来ない、歴史的な山の事件が次々と飛び出して、その記者を驚かせた。

大和氏は、先ず歴史的遭難事件といわれる、昭和の初めの「早稲田大学、針ノ木沢遭難」の話をした。

それは吹雪のひどい日で、大和氏達は頻りに、出発を見合わせるように、進言したが、リーダーはしまいに声を荒げて、制止を振り切って出掛けた。一行の雪崩の遭難が伝えられたのは、一時間も経たない内であった。その悲報を下界に知らせるべく、大和氏が雪深い中を、大町対山館にたどり着いたのは、夜中であったはずである。対山館の主人の当時の記録に、

「けたたましく戸をたたく音がした。あけると、雪にまみれて遭難を告げる大和の姿があった」

と読んだことがある。

（注・確か昭和三十七、八年頃、大町で出版された、百瀬慎太郎氏の遺稿集「山を想えば」の中に書かれていたと思います。この通りの文ではありません。部厚い立派な本でしたが、残念乍ら、今手許にありません）

大和氏達の進言に反対したリーダーは、健在であった。遺体が発見されて、林の中で次次と焼かれた。その通夜に、山のボッカ（人夫）達が酒をあおって、大声ではしゃいだ。昔から、日本では慶弔に酒はつきものだが、涙にくれる家族の前で騒ぐ山の人間達に、大和氏は我慢出来なかった。遂に大声で咎めると、

「この若僧が」

と焼けぼっくりを持って、刃向って来たそうである。

「厳粛であるべき、人の死を前にして、この山の人夫達は不心得でした。」

と大和氏が述懐したのを覚えている。又、自分の進言にも拘らず、取り返しのつかぬ大事に到ったその心中は、如何ばかりであったろうかと想像される。

それ程、慎重であった大和氏も後日、乗鞍岳で遭難をしでかす。それは春先と思うが、肩の小屋から乗鞍岳頂上へ吹雪の日に、どうしても登りたいというお客があった。長野県出の黒田代議士と松本高校の井上先生（それにもう一人？）である。大和氏は自信がなかった。山は一面乳白色のガスに包まれ、それこそ方角がまるで分らない。併し、代議士はきかなかった。

頂上を極めて、下りかけた時方角を誤ったらしい。行けども行けども、肩の小屋には達せず雪は胸まで深まるばかり。一行は、吹雪の中を一歩一歩ラッセルしながら進む。やがて、完全に道に迷ったことに気付く。暗くなり雪穴を堀る。

飛弾側の新聞が早くも、代議士一行の遭難を急報したので、松本では騒然となった。この遭難事件について、大和氏は余り多くを語らなかったが、何日目かに、遂に飛弾側の牧場のような物置小屋に辿り着いたらしい。既に、皆の体力は限界を超えていた。中でも、井上先生は一番弱り果て、鼻水を垂らして、おがむような仕草をした。いよいよ駄目かと思ったそうである。井上先生は凍傷で、結局、両足指を全部切断された。一行が、こんな飛弾側に迷い込んだとは、救援隊の誰しも、想像しなかったようだ。大和氏の不屈の闘志が、一行の生命をとりとめたことと思う。

さて、奥さんの菊江さんは（今、七十四歳）、今松本に嫁いでいる長女、戦死された長男、事故で亡くなった次男の幼な児達をかかえて、この悲報に接した。

「わたしは、主人が遭難したと聞きましたが、必ず生きていると信じました。子供達にも、父ちゃんは必ず元気に帰ってくると言って聞かせました」

と菊江さんは、当時を回想されたことがある。大和氏の生存を聊かも疑わないこの信頼こそ、大和氏の生涯のガイド生活を陰で支えたものと、聞いていて、目頭が熱くなった。

大和氏の生涯を顧みて、そのガイド生活の圧巻は、何といっても「白頭山冬期登攀」であろう。京都大学の今西錦司、西堀栄三郎氏等によって、昭和九年から十年にかけて敢行された。この遠征隊には、北アルプス全地区を夫々代表して、三人のガイドが選ばれた。

故大和由松氏　1961.8.28　燕岳合戦沢付近で

安曇郡を代表して、有明の大和由松氏。立山の芦峅寺を代表して、佐伯宗作氏。蒲田川を代表して、今田友茂氏の三人である。

宗作氏は、後日、立山地獄谷の遭難で一命を落し、友茂氏は戦争で死んだ。友茂氏は、蒲田川の今田金次郎氏と穂高小屋の主、重太郎氏の間の兄弟と聞いたが、定かでない。

「人のよい人物で、技術も確かだった」と大和氏が言ったことがある。宗作氏については、ついぞ話を聞かなかったが、その長男は、十五年程前の第一回南極探険隊に選ばれた。白頭山の面々が、宗作氏を偲んで、推せんしたものと思われる。

白頭山登攀の模様は、その登頂記「白頭山」に譲るとして、大和氏の話を綴ろう。

満州（今は、中国の東北地方）鴨緑江の奥は、当時、治安が十分でなく、匪族、馬族が出た。一行は、皆神経が敏感になっており、或日野営の折、「匪族が襲って来る」という非常事態で、カメラや映写機等金目のものを地中に埋めたりした。あとで、何かの間違いであることが分り、そのあわて振りに、互に大笑いしたそうである。

大和氏は、厳寒の中で荷の上げ下しを指揮した由だが、

「山岳スキーが自在に出来たことが、何よりの武器であった」

と言っていた。

そもそも、大和氏が名ガイドの名を高めたのは、ザイルさばきもさることながら、まだ案内人や山の人達が、スキーをはかない時に、山スキーをマスターした技術による。（注、大正の初めと思う）十貫目有余の荷を背負っては、「兎スキー」と称する独得の滑り方で、目のくらむような急斜面でも、林の中でも滑り下り、人々を感嘆せしめた。兎スキーというのは、上手に腰を落して、決してころばない技術でもある。

白頭山冬期登攀の壮挙は、後日ヒマラヤ登山につながる準備であったと聞いている。若し、日支事変、太平洋戦争が起らなければ、大和氏も四十歳始めの円熟した時期に、ヒマラヤ登山の先鋒となったことであろうに、残念である。

大和氏は、服装を飾らない人であった。何時も、古ぼけたハンチングをかぶり、粗末な衣服で、冬以外は何時でも地下足袋であった。どこの田舎のおやじかと思えた。それについてこんな話がある。

昔、京都の久邇宮様兄弟を、北アルプスに度々案内していた頃、県か町かの警察が、物物しく警護しているところに、田舎のおやじ（大和氏）が顔を出して、宮様の山への先導を始めるので、まわりの人はびっくりした、というのである。大和氏は、

「山では位はなくて、皆平等」

という信念を持って、人間対人間として、誰とでも同じように付き合った。

大和氏は、服装ばかりでなく、心も飾らない人であった。正直で親切であった。そして恐らく、お金には生涯縁遠い人でなかったかと思う。ガイドをしても、お金には恬淡としていた。私は、払ったガイド料を、又借りて帰ったことがある。とんだお客だが、こんな時、大和氏は少しも嫌な顔をしなかった。

大和氏には特技があった。何日も何日も、一緒に山に入っていると、男同志の生活で、うるおいがなくなる。よくしたもので、大和氏は軽妙なウィットに富み、人を笑わせる骨を知っていた。特に、女性の話が面白かった。このユーモアをどこで勉強し、仕入れたのであろうか。多分に天性であろうと思う。大和氏と一度でも山に行った人が、それを終生忘れられないのは、こういう人柄によったと思う。

大和氏の五十年にわたる、山の人々との付き合いは、広く且深かった。私共が行く、先々の旅館の中には、じいさんの代から三代にわたるところもあって、私を驚かせた。

昭和三十四年の冬であったろうか、私達は、乗鞍岳に登り、更に、悪天候をついて、平湯温泉へ降ったことがある。四岳を過ぎる頃から吹雪に見舞われて、難渋を極めたが、とも角、夜おそく船津屋に着くことが出来た。大和氏は、出発の時から、その前年に永眠された船津屋のご主人に、線香をあげたいと願望していた。大和氏の話によると、その昔、お客を連れて安房峠から平湯に入る時には、闇夜の中を安房峠の頂上まで、この船津屋のご主人が提燈を持って迎えに来てくれたそうである。その欲得を離れた親切に、大和氏は感動し、終生忘れられなかったに違いない。

又、松本駅前のひだ屋（今は旅館をやめた）のご主人とは、格別の懇意であった。冬の早朝五時頃松本に着いても、ひだ屋のご主人は、きちんと羽織を着て、私共を玄関に出迎えてくれた。それも幾度となく。

大和氏は、このような心暖まる人達に囲まれて、生涯の大半を過し、又、自分もそのような思出を、沢山人に残したことと思う。

最後にひとこと。大和氏は、長男を戦争で失い、次男を昭和電工の事故で亡くした。その悲憤落胆は、如何ばかりであったろうかと思う。若し、二人が生きておれば、大和氏はとっくに、楽隠居であったかも知れない。併し、私は山を歩いていて一度も、大和氏の口から、このご子息達の話を聞かなかった。大和氏は、物ごとに決してぐちめいたことを言わなかった。私は、親としての気持を忖度して、なかなか、真似の出来ることではないと思ったことである。

（住友軽金属工業KK勤務）

故大和氏（右）と筆者　1963.4.5　乗鞍岳頂上で

南極からのたより（1）

太田昌秀

大町の皆さん、美しい山並みの麓で元気にお暮しのこと、存じます。私は数年前にオスロへ移って来て、毎年の夏を北極海のスピッツベルゲン島ですごして来ましたが、昨年から今年にかけての冬は南極へ出かけました。たった四人の調査隊で、日本の昭和基地からはるか西にあるエルスワース山脈という所へ行きました。

初雪が降って霧氷の美しいオスロを十一月一日に発ち、グリーンランドと北極カナダの氷の上を飛びこえ、晩秋のロス・アンジェルスにつき、一日、デズニーランドで子供のように遊びました。こゝからは、米海軍の輸送機に乗せられ、真夏のハワイとサモア島を経て、春たけなわのニュージーランドに着きました。こゝで南極用の重装備を整え、更に九時間とんで米国のマクマード基地に着きます。この基地は、終戦直後のアメリカ進駐軍基地に似ていて、カマボコ兵舎が並び、砂ぼこりの立つ道を軍用トラックが走り廻っています。この基地は、ロス海の西岸近くにある火山島にあって、背後には三七〇〇㍍のエルブス火山が真白な氷河に包まれてそびえ、私達の着いた頃には、数分おきに灰色の煙を噴き上げていました。ロス海の対岸には、南極横断山脈が三～四千㍍の高さで水色に輝きながら連っています。この基地から数キロ離れた所には、ニュージーランドのスコット基地があります。ロス海の海氷の上に飛行場があって、スキーをつけた四発の大型輸送機が発着しています。

私達は三週間この基地で野外調査のための装備を整え、十一月二十九日にエルスワース山脈への一七〇〇キロを飛びました。上から見ると、まったくの白い氷原の広がりで、時時灰色の雲の影が弱いアクセントを作っているだけです。輸送機の轟音の中で六時間ほど我慢しているとはるか前方に高い黒々としたエルスワース山脈が見えて来ます。

このエルスワース山脈は、一九三五年にエルスワースが西南極横断飛行の時に発見し、その後二十年以上誰も目にした人はありませんでしたが、国際地球観測年が始ってから、一九六一～一九六三年の間にアメリカのミネソタ大学探険隊が二度訪れて、地形と地質の調査をしました。この時の測量で、この山脈の北部に南極大陸最高のヴィンソン山、五一四〇㍍があることが判りました。空から見ると、氷に削られた光った黒い峯がほゞ南北方向に連り、西側の高い氷原から東の谷へ向っていくつもの氷瀑がかゝり、青氷が輝いていました。

ベースキャンプは、山脈の南東麓に作りました。ベースキャンプと云っても、緑色のテントが三つ立ち、ドラム罐数本とスノースクーターとソリが集っているだけで、二～三キロ離れると、大雪原の白の中にとけこんでしまって、どこにあるのかも判りません。テントの前に深さ二・五㍍ほどのトンネルを五㍍位堀って、この中に食糧や装備を積みこみました。雪の上に置くと、吹雪の度に堀り出さなくてはならないからです。トンネルの中は零下二十五度位でとても良い冷蔵庫です。外の気温は零下十～二十五度でした。夏ですから勿論太陽は一日中沈みません。風がない時には、日向で日光浴が楽しめる程暖かく感じますが、風が吹くと死ぬ思いです。完全に重装備していても、どこかの空間から物凄い寒さが刺しこんできて、アノラックの毛皮とヒゲが凍りつきノートを書くのに手袋をとると、数分で小指の方から感じなくなってきます。幸い今回は強い風の日は少くて助かりました。ビールやコーラは、ベットの下などの暖い所にしまっておきましたが、やっぱり凍ってしまって、罐が変形し、ふたの継ぎ目が裂けます。溶かすとガスが逃げてしまって、苦い水や甘い水になってしまいます。凍ったジュースを火の上でとかし、コップに注いで十分位すると、また凍りはじめて、シャーベットのようになってしまいます。

この山の調査は丁度二ケ月間でしたが、その間中ベースキャンプに居たわけではありません。約一週間分ほどの食糧をソリに積んで山の高い所へ出かけ、小さい二人用の屋根型テントを二つ張ってあたりの調査をし、食糧がなくなるとベースへ戻り、また次の調査に出かけるという具合です。全部で八ケ所の前進キャンプを作り、ベースで暮したのは四週間位でした。前進キャンプのテントは小さいので狭くて大変です。ノルウェー人は特に体が大きく膝をまげて座れないので天気の悪い日など、大男が一日狭いテントの中に寝ころがっていると、食事を作るのも大さわぎです。下からはシンシンと氷の冷たさが伝って来ますし、外は目もあけられないような吹雪の時など、南極はやっぱり大変な所だと痛感しました。しかし、風のない晴れ渡った日が一日あれば、数日の悪天候の苦しさを忘れてしまう位素晴らしい世界です。大きな雪の結晶がプリズムの働きをして、虹色の小片が一面にキラキラと輝き、雪の白さにも無限の微妙な変化があることに気づきました。

ヘンダーソンの頭から下る道の中間の丘

博物館だより

人事異動　3月31日付で降旗英子学芸員補は退職された。

山と博物館第20巻第4号
一九七五年　四月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額　四〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、一九二）